

満濃池の決壊と修復

香川県まんのう町の満濃池は日本一のため池です。池の周りは約 20km、貯水量は 1,540 万トンを誇り、2016 年には世界かんがい施設遺産に登録されています。満濃池では、大宝年間（701～704 年）の創築以来、何度も決壊や修復が繰り返されてきました。今回は幕末から明治初頭にかけての満濃池の決壊と修復についてご紹介します。

■安政元年の決壊

安政元年（1854）6 月 14 日、讃岐地方を強い地震が襲いました。この地震で堤防の地盤が緩んだためか、前年に完成した木製の樋から石の樋への普請工事のためか、7 月 5 日午後 2 時頃、樋外の石垣から水が漏れているのを池守が発見しました。翌日から水漏れを防ぐための対策が講じられ、9 日には高松・丸亀両藩から人夫 400 人を出して 300 俵の土俵を孔口に投入しましたが効果がなく、ついに決壊に至りました。数日続いた漏水で池の水が減少していたので、人畜への被害は少なかったものの、肥沃だった耕地は一瞬にして河原となりました。この後、満濃池はしばらく廃池となりました。＜讃岐のため池誌編さん委員会編「讃岐のため池誌」2000 年、香川県仲多度郡編「仲多度郡史」1918 年など＞



■明治 3 年の修復

満濃池の堤防が決壊して以来、天領の榎井・五条・苗田の三村（現琴平町）では用水の手当がなく、植え付けに困窮していました。榎井村百姓総代の長谷川佐太郎が、慶応 4 年（1868）政府に満濃池再築の嘆願書を提出したところ、政府より許しを受けた倉敷県が高松藩、丸亀藩、多度津藩の三藩に対して満濃池改築を働きかけることになりました。しかし、三藩の意見は一致しませんでした。佐太郎が私財を投じて各藩の間を斡旋、奔走した結果、明治 2 年 9 月に石穴掘削の工事に着手することができました。工事は高松藩執政・松崎浩右衛門の意見により堤防西隅の岩盤に穴をうがって底ゆるにすることとし、石穴の掘削には軒原庄蔵を起用して明治 3 年（1870）3 月に石穴が貫通、6 月に築堤が完成しました。満濃池は破堤から 16 年目に甦りました。＜満濃池土地改良区「満濃池史」2001 年、香川県教育会編「さぬき・人・ここにあり」2013 年など＞

